

BEDOK HERITAGE TRAIL

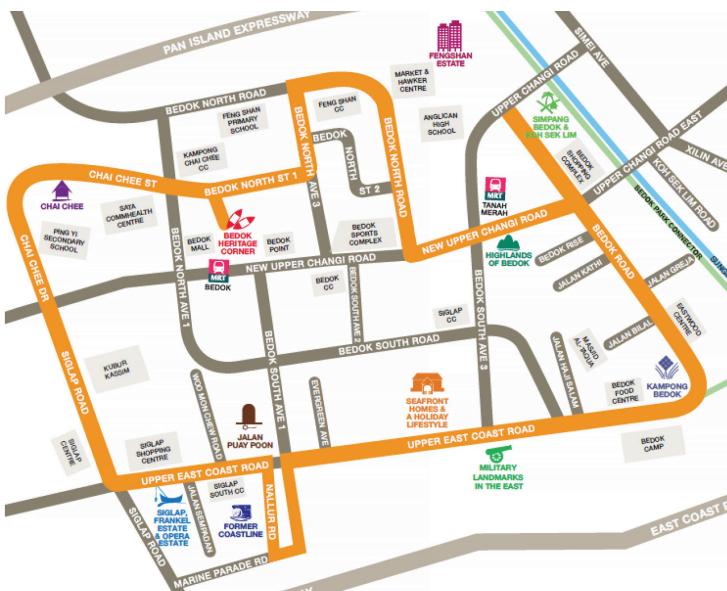
ベドック ヘリティジトレイル

史蹟史料部

ベドック地区は、シンガポールの東地域に位置しているおだやかな雰囲気の街で、たくさんのHDBや住宅が立ち並んでいます。

ゆったりとした時間の流れを感じつつ歩いていくと、ポイントごとに標識が建っています。標識を読み進めていくと、この地域が歴史と共に大きく変化してきたことがうかがえます。昔のこの地域の様子について想像を膨らませながらのトレイルとなりました。

それでは、今回歩いた順に紹介していきましょう。



(National Heritage Board より)

①Bedok Heritage Corner

たくさん的人が行き交うこの場所は、MRT東西線のベドック駅を出てすぐ、Bedok Town Square横の広場です。ここでは、写真のような小舟がいくつか並んでいます。これらの舟には、かつての漁を中心とした漁村のくらしの様子や時代と共に街が開発されてきた変遷を見る事ができます。

トレイル地図も表示されており、旅の出発地点にもゴール地点にもなる場所でした。



舟型の説明板



(上段左から)土田教諭、太田教諭、河崎教諭、藤原教諭、宮川参事官、四十万理事

(下段左から)両頭さん、西山教諭、梅田事務局長

②Chai Chee

チャイ・チーとは、福建語で「野菜市場」を意味します。現在、静かな住宅街となっているこの場所は、20世紀初頭には、野菜売りや屋台が立ち並ぶ活気のある場所だったそうです。人々がたくさん集まるこの地域では、住民を支援する市民団体や消費者クラブも設立されました。シンガポールが経済的に大きく躍進していくなかで、人々の活気や熱意が湧き上がる街だったのだろうと想像します。



昔の海岸線にあった防波堤



にぎわう消費者クラブ

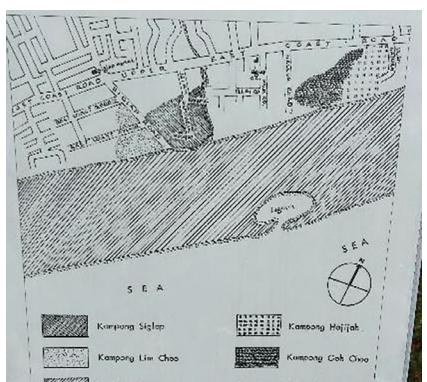
③Siglap, Frankel Estate and Opera Estate

地図通りに歩いていると、随分と早い段階でOpera Estateと示された住宅地がありました。少し高い位置にあるこの場所からはシグラップの街や遠くマリーナの方まで見渡せそうです。さらに進んでいくと、イスラムの墓地を発見しました。シンガポールは国土が非常に限られているため、埋葬墓地が残っているのは稀です。古い墓地も再開発されたり、観光資源として利用されたりしており、現在では火葬後に宗教ごとの納骨堂に収めたり海洋散骨をしたりすることが多いようです。

さて、アッパーイーストコーストロードまで来ると、バスが行き交いカフェやレストランが並ぶ街並みになります。シグラップという地名は、マレー語で「暗い者」または「覆い隠す暗闇」を意味し、村が設立された当時に日食があったため、もしくは、生い茂るヤシの木が太陽光を遮ったためと考えられているそうです。この地域には、いくつかのカンポン(村)があって、そこに住む人々のほとんどが漁をして暮らしていたそうです。



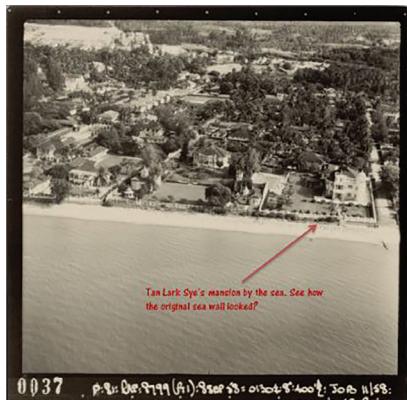
イスラムの墓地



1970年代のシグラップ周辺

④Former coastline

昔の面影はほとんど残っていないベドックトレイルですが、MRT線のシグラップ駅のほど近く、マリーンパレードロード沿いには、かつての海岸線を示す防波堤が今にその面影を残しています。コンクリートでできたおしゃれなアーチを描く柱や欄干には植民地時代の建築様式も見られます。鉄製の門は、ヤシの木や太陽に雲、海がモチーフとして描かれており、当時、この辺りには裕福な人たちが住み、陽気にくらしていたのだろうと想像が広がる史蹟でした。一方で、現在はこの場所から海辺は見えず、HDBと住宅、高速道路など現代的な風景が見えます。ずいぶん広大な面積を埋め立てたことを実感できる史蹟でもありました。



1958年、シグラップのアッパー・イースト・コースト沿いに建つ海岸バンガローの航空写真。シンガポール土地管理局コレクション、国立公文書館



昔の海岸線にあった防波堤



太陽と海をモチーフにした門のデザイン

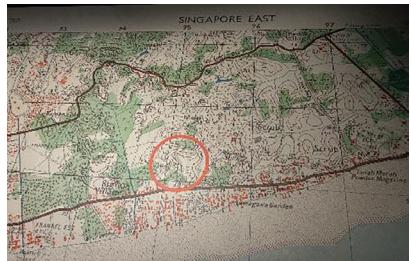
⑤Jalan Puay Poon

日本人として目を背けてはならないのが第二次世界大戦時に日本がシンガポールの人々に対して行った肅清の事実です。シンガポールを統治下に置いた日本軍は、この地を「昭南島」と名付け、日本統治への反対勢力を鎮圧することを目的に処刑が行われました。多くの中国民間人がチャンギビーチやプンゴルビーチ、セントーサ島やタナ・メラなど様々な場所で射殺され集団埋葬されました。ここ、



ウォー・メモリアル

Jalan Puay Poonもそのような埋葬地の一つです。1966年に発見された一部の墓地では、2,000体以上の犠牲者の遺骨が含まれていたそうです。彼らが身に付けていた私物の一部は現在、シンガポール国立博物館に収蔵されています。また、犠牲者の遺骨は、1967年に完成した日本占領時代の犠牲者を追悼するウォー・メモリアルに移されました。現在は、トレイルの標識しかありませんが、二度と同じような犠牲者を生み出す立場になることのないように歴史の事実をしっかりと認識することが大事だと感じました。



遺骨発見を示す地図(国立博物館)



犠牲者の私物の一部(国立博物館)

⑥Seaside homes and a resort-like lifestyle (海辺の邸宅とリゾートのような暮らし)

イーストコーストは昔からシンガポール人の憩いの場で、海辺にはレストランやモーテル、クラブが立ち並び、コレック(小型のマレー船)のレガッタや、油を塗った柱登りなどの遊びで賑わっていたそうです。

今も当時の様子を残す「ホア・ユー・ウイー」シーフードレストランは、1920年代のバンガローを利用しており、今でも賑わいを見せていることに驚きました。住宅街にはバウハウスやアールデコなど多様な建築様式が混在し、日差しを避ける窓のひさしや通風口など暑さ対策も工夫されていたそうです。広い庭や車寄せを備えた家々は住民の豊かさを示す一方、使用人は1940年代風の質素な集合住宅に暮らしていました。現在では多くの海辺の邸宅やレストランは姿を消しているとのことですが、当時のリゾート感がわずかに感じることができました。旧海岸線近くの“堀”であったと考えられる場所を発見し、今と昔の海岸線の違いに、シンガポールの発展してきた歴史を感じました。



1958年アッパー・イースト・コースト地区沿いの海辺のバンガローの航空写真



旧海岸線近くの堀



シーフードレストラン「ホア・ユー・ウイー」

⑦Military landmarks in the east

(東部の軍事的ランドマーク)

タナ・メラ(マレー語で「赤い崖」の意)は、かつて海に面した赤土の崖にちなみ名付けられました。ここは敵の接近を見張る要所であると同時に、船乗りが航路を確認する目印でもありました。1603年、この沖合でオランダがポルトガル船サンタ・カタリナ号を拿捕し、貿易独占に挑戦しました。これを正当化するため、法学者フーゴー・グロティウスが『自由海論』などを著し、国際水域や航行の自由といった近代的概念の基礎を築きました。またイギリスはこの地に火薬庫や砲台を設置し、補給用の桟橋も整備しました。戦後には丘の土が初めて埋め立てに使われ、ベドックからタンジョン・ルーまでの海岸線整備が始まりました。現在でも赤い土の崖の名残と思われる丘を発見し、過去にあった砲台に思いを馳せながら、この地を眺めました。



チェン・チョン・スキー作
「フォート」と題された絵画



現在のタナ・メラ付近にある丘

⑧Kampong Bedokカンポン・ベドック(ベドック村)

ベドック・コーナーは、1850年代にできた海沿いのカンポン・ベドック・ラウトと内陸のカンポン・ベドック・ダラットから始まりました。村人は漁業や農業、ゴム農園の仕事のほか、英軍基地関連の産業や屋台などで暮らしていたそうです。

やがてこの地はマレー人社会の中心となり、通り名にも生活文化が反映されました。ジャラン・ビラル沿いのモスクは地域の拠点であり、華人農家も礼拝の声で時間を知ったといいます。また、1920年代に建てられた「ヴィラ・カハール」は社交や催しの場として栄えました。

ここには、かつてのイーストコースト・ロードの終点であつた「シーフィグ(締め殺しイチジク)の木」が今でも残っていました。

2005年に完成したベドック・フードセンターは、インドネシア・ミナンカバウ様式の屋根と中庭を備え、かつてのカンポンの共同生活を感じさせる造りになっています。



シーフィグの木



20世紀初頭のカンポン・ベドック
国立博物館所蔵



ベドック・フードセンター

私たちが訪れた時も、多くの人達で賑わっており、かつての共同生活の雰囲気に想いを馳せながら過ごすことができました。

⑨Simpang Bedok and Koh Li

(ベドックの交差点とコー・リム地区)

シンパン・ベドック(「ベドックの交差点」の意)は、1980年代まで残っていたマレー人のカンポン(村)でした。周囲には華人のランプータン農園とマレー人集落があり、チャンギに駐留する英連邦軍兵士の憩いの場や食事処としても人気でした。その名残で今も深夜の食事スポットとして知られており、多くの賑わいを見せっていました。地域を貫くアッパー・チャーンギ・ロードは再開発で静かになりました。新たにニュー・アッパー・チャーンギ・ロードが幹線道路となりました。

近くのコー・セク・リム地区には農場やゴム園、ニッパヤシが広がり、葉は屋根材に、実(アタップチー)はアイスカチャンなどの菓子に使われました。1951年には空港建設で移転を余儀なくされた人々のため、政府がこの地を買収。また砂採取で大きな湖ができ、現在はベドック貯水池となつたそうです。また、この地区には日本人学校の社会の教科書にも載つてゐる水資源に関する施設「NEWaterビジターセンター(現在閉館)」が建つていました。ベドックとシンガポールの水資源とのつながりを初めて知り、驚きと学びがありました。



NEWaterビジターセンター



ベドック・マーケット

編集後記

普段はバスやMRTに乗つて通り過ぎてしまう街を歩くことができた今回の散策を通して、戦後、大きく街の様子が変化していったのであろうということを感じました。現在のベドックは住宅街です。埋め立て前のカンポンを偲ばせるものは、そう多くありませんが、ベドック・フードセンターの駐車場に今も残るシーフィグは、過去と現在をつなぐ大切なシンボルであるように感じました。きっと、カンポンに住んでいた人々もこの日の私たちと同じように、この木を見上げたり木陰にたたずんだりしたのでしょう。次々と開発され、整備されていくシンガポールの街ですが、昔の街の様子や人々の生活を想像しながら散策するのもよいものでした。

出典: National Heritage Board bedok 公式ガイドブックより
<https://www.roots.gov.sg/places/places-landing/trails/Bedok-Trail>

文責・写真:西山さやか、藤原健人
(日本人学校小学部チャンギ校教諭)